

第46回 日本ジオパーク委員会議事録

日時：2022年9月28日(水) 10:00～13:00

場所：ちよだプラットフォームスクウェア 504～506 会議室

<委員長>

中田 節也 東京大学名誉教授 防災科学技術研究所火山研究推進センター長

<副委員長>

宮原 育子 宮城大学・宮城学女子大学名誉教授 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授

<委員>五十音順

- 欠 ヴォウォシェン・ヤゴダ 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 マーケティンググループ
大野 希一 一般社団法人 鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員
欠 久保 純子 早稲田大学 教育学部 教授
柴尾 智子 元公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
欠 下田 一太 筑波大学 人間総合科学学術院 准教授
菅原 久誠 群馬県立自然史博物館 地学研究係 主幹
田中 裕一郎 産業技術総合研究所 地質調査総合センター シニアマネージャ・招聘研究員
新名 阿津子 東北公益文科大学 公益学部 准教授
欠 橋詰 潤 新潟県立歴史博物館 学芸課 主任研究員
長谷川 修一 香川大学特任教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長
長谷川 卓 金沢大学 理工研究域地球社会基盤学系 教授
山口 勝 日本放送協会横浜放送局 放送部 チーフアナウンサー
渡辺 綱男 一般社団法人 自然環境研究センター 上級研究員
渡辺 真人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター 上級主任研究員

<日本ユネスコ国内委員会>

氏師 大貴 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

<関係省庁(オブザーバー)>

- 沼 美紗 内閣府 地方創生推進室 参事官補佐(内閣府地方創生推進事務局)
上村 兼輔 内閣府 地方創生推進室 主査(内閣官房 デジタル田園都市国家構想実現会議事務局)
佐藤 佑樹 経済産業省 産業技術環境局 総務課産業技術法人室 係長
樫野 誠 国土交通省水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 課長補佐
塩見 明子 国土交通省 観光庁 観光地域振興部 観光資源課 主査
川瀬 翼 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 室長補佐
勝木 慎太郎 環境省 自然環境局 国立公園課 国立公園利用推進室 環境専門員

<事務局>

齊藤 清一 JGN 事務局長
古澤 加奈 JGN 事務局次長
田上 順一 JGN 事務局次長
山崎 由貴子 JGN 事務局員
関村 絢 JGN 事務局員

【開会・委員長あいさつ・報告事項】

委員長：今回も直接面談で会議を開催することができて非常に喜ばしいと思う。あいさつというよりも報告事項を中心にしたい。

夏の審査は予定通り無事に行うことができた。みなさんには参加いただいて感謝する。世界の審査のほうもこの9月から日本では2年ぶりに再開した。台風の影響があったりして、結構ハラハラしたが終了した。

これに関連して、世界ジオパークネットワークの中のアジア太平洋地域のネットワークのシンポジウムが9月4日から11日に開催された。これには日本からもかなりの方が現地参加し、オンラインでも参加をした。その会議に先立って、ユネスコ世界ジオパークカウンスル会議が行われた。カウンスル会議というのは、ユネスコ世界ジオパークの審議機関であり、ここで審査された結果がユネスコの執行委員会に送られて、そこで追認される形になる。第7回になるが、このカウンスル会議が9月3日と4日に開催された。12名のメンバーの内、6名が改選されて、今期の議長としてはGuy MARTINI さんになった。副議長に私になり、議長をサポートする形になる。Helga CHULEPIN さんが報告者になっている。この体制で2年間進むことになる。

今年のカウンスル会議には夏の陣と冬の陣があり、今回は夏の陣を終えたというところ。冬の陣は12月に開催される。夏の陣では、全部で7つの新規地域、1つの見送り地域があり、それぞれについての審議をし、7地域について認定可ということにした。

その中にはフィリピンとニュージーランドで初めてジオパークが認められた。国として2つ目のジオパークが誕生するのがイラン、タイ、マレーシアになる。インドネシアが2つ今回認められていて、現在6つが8つになる。冬の陣ではさらにインドネシアの2地域の審査が控えているので、順調にいくと10地域になる。これは日本の数と同じになるか上回るかという状況であり、インドネシアが強い勢いで増加してきている。

その他、28の再認定審査を行い、その内の3つにイエローカードを提案している。それから領域拡大(10%未満)、領域縮減について6つ承認された。洞爺湖有珠山も9%削減ということ認められた。

引き続き APGN (アジア太平洋ジオパークネットワーク) の会議があり、そこで役員改選も行われた。これに関しては、委員が選挙委員長を務めていただいたので説明をお願いします。

委員：アジア太平洋ジオパークネットワークには Advisory Committee (AC) という決定機関があり、その下に各ジオパークの代表が出ている Coordination Committee (CC) がある。Advisory Committee (AC) は各国1名代表、世界ジオパークネットワークとユネスコからそれぞれ1名がメンバーとなる。このほかに、選挙で5名選ぶ。立候補10名のうち5名が無事当選した。各国代表と選挙で選ばれたメンバーの中から Coordinator、Vice Coordinator 選挙をし、次のような結果になった。Coordinator は有効な立候補者が1人だったので、信任投票という形で選ばれた。Vice Coordinator は3名の中で選挙となり、マレーシアの Ibrahim KOMOO さんと JGN 事務局次長が当選した。これで2年間アジア太平洋ジオパークネットワークをこのような

形で運営していくということになる。そして委員が国の代表として出ている。よろしくお願いいたします。

委員長：ユネスコ世界ジオパークプログラムと並行して走っているプログラムで、IGCP（国際地質科学計画）がある。すなわち、IGCPとユネスコ世界ジオパークでIGGPという1つのプログラムになっている。IGCPとジオパークのジョイントしたプログラムとしてIGCP 731というのが走っている。その活動の結果として、ユネスコ版の地質100選が10月に決定する。その中に私たちが3つ推薦したうち2つが日本から選ばれた。「GENBUDO CAVE（玄武洞）」、「NOJIMA FAULT（野島断層）」。この2つを含む100選が10月にスペインで行われるIUGS60周年記念会議で紹介され、世界に公表されるという形になる。

これらはGeological Heritage Sitesという名前だが、実際にはジオサイトと同義である。これについても色々な機会を使って宣伝していきたいと思っている。

これから国内の世界審査関係の報告を事務局からしていただく。

事務局：第7回アジア太平洋ジオパークネットワークシンポジウムは、タイのSatunユネスコ世界ジオパークで開催された。大会事務局はカウンシルの日程も入れて4日から11日と発表しているが、7日に開会式があり10日に閉会式があった。参加者はオンラインと現地を合わせて約450名と聞いている。現地参加者は300名弱で、そのうち日本からは21名参加している。オンラインの参加者は約150~160名と聞いている。次回の第8回アジア太平洋ジオパークネットワークシンポジウムの開催は、2024年9月にベトナムのカCao Bangユネスコ世界ジオパークで開催されることが決まった。

それから昨年12月にユネスコ世界ジオパーク国際会議がオンラインで済州島開催があったが、そこで初めてユネスコ世界ジオパークユースフォーラムが開催され、日本ジオパーク委員会の推薦として糸魚川出身の方を日本代表として参加していただいた。その後、9月13日から17日までインドネシア・バリ島のBaturユネスコ世界ジオパークがホストとなり、ユネスコ世界ジオパークユースフォーラムセミナー&キャンプというのが開催されて彼女も現地で参加された。

その他、報告事項になるが、現在ようやくユネスコの現地審査が行われている。9月の頭に隠岐ユネスコ世界ジオパークに最初に審査員が入り、台風の中で開催されたが無事終わった。そして先週、糸魚川に2名の審査員が来られてこれも無事に終わり、その同じ2人が島原半島ユネスコ世界ジオパークに行き現在現地審査が行われているところ。明日終了予定で、東京経由で帰られる。

来月は白山手取川の新規の審査がようやく行われる。2名の審査員は、白山手取川の審査が終わった後に伊豆半島に再認定の審査に行かれる。並行して、山陰海岸、阿蘇にも別の審査員2名が来られる予定。それぞれの現地調査には、JGC委員が同行支援した。

委員長：同行した委員から報告をお願いします。

委員：9月4日から8日の日程だったが6日に台風が直撃して、その前の日から船と飛行機が止まってしまった。隠岐は島がいくつかあるが、島の移動ができるかどうかという緊迫した感じになったが、事務局が臨機応変に船をチャーターしたり、台風直撃の日はオンラインで話し合いをしたり、柔軟な対応をされていた。

審査の様子としては、スペインの審査員とフィンランドの審査員の2名で、前回の指摘事項への対応については丁寧に説明を行い、新しい隠岐の島町のビジターセンター、自然館の様子を見て前回の指摘の改善の確認をしたり、標識看板の充実だったりを丁寧に見ていた。

印象に残ったのは、そういう指摘事項もさることながら、そもそもジオパークやジオサイトを一般の人に分かりやすく伝えられているのかどうか、また、新しい一般社団法人の体制を立ち上げたという説明をした

が、その構成員だけでなく、地域のお店やレストランの個々の施設がいかにこのジオパークと一緒に活動しているかなど、地域ぐるみの取り組みになっているかどうかというところを一生懸命聞いていたのが印象的だった。

全体としてジオパークを本当に良いものに育てて応援するという姿勢で審査をされているのが印象に残った。

私は台風の影響もあり途中で帰らなければいけなかったが、隠岐の事務局からの報告では全体として良く出来たのではないかなというような連絡を受けている。

委員長：海外の審査も同時に数多く行われていて、日本の審査員も海外の審査に参加し始めている。委員が済州島に行かれたし、他の調査員も今、釜山と Jeonbuk West Coast の審査に行っている。私はイランから帰ってきた。他の委員はブラジルに行くことになっている。このような具合に国内も忙しくなっていたし、海外も非常に忙しくなっているのが世界の状況。

日本で行われる世界の審査には委員会から必ず1人は行くことになっている。島原半島、糸魚川の現地審査同行者にコメントをお願いします。

委員：糸魚川の審査は9月20日に糸魚川に入り、24日までの審査だった。私も最終日はどうしても同行出来なかったが、マレーシアとインドネシアの審査員が来日して審査が行われた。

大きなところでは、海域までのエリア拡大について提言があった。海の幸をかなり推しているのも、やはり海域を含めたほうが結びつくのではないかなというところ。

後はPRをもっとしていくというところだが、観点としては地質だけではなくて、自然や文化をもっと結びつけてやっていくというところ。

他は、インドネシアの審査員は教育や持続可能な開発というところでアドバイスをいただくことが多く、特に糸魚川の場合は石灰岩の鉱山があるので、石灰岩の鉱山の会社と糸魚川ジオパークが対話を始めているというところを糸魚川としては推していた。その対話を続けて、今後の自然の観点、生物の多様性の観点をモニタリングしていくという話で紹介をしたところ。

感じたのは、糸魚川の通訳者が素晴らしく、内容をしっかりと理解してある程度自己判断できる中で通訳をするという事がすごく大事だと思った。日本語を話している側が間違っていた点、例えば、地図の北や南を間違っていたのを、糸魚川の通訳者はちゃんと直して通訳をしていた。そういったところが素晴らしかった。

委員長：島原半島について報告をお願いします。

委員：島原半島の審査の状況を報告する。

糸魚川に引き続いて、糸魚川と同じ審査員2名が島原半島入りをした。最初のミーティングの概要の説明の中でとにかく計画作りというものを島原半島が推して、基本理念・基本計画・行動計画を作った。その点については非常に大切なことだと評価をいただいたが、計画の中に sustainable development の言葉の数が少ないと指摘を受けた。実際にはそういうニュアンスを含めて言っているが、英訳をした時に単語を省略しすぎてしまい、日本語版には書いてあると説明したが、そこは納得していただけなくて、もう少し詳しいものを書いて提出してくださいという宿題をいただいた。

それと、島原半島の海域と陸域を含めたエリアの説明をした。それについては実は、島原半島には流れ山が海域に点在しているが、そこは厳密に言うと、エリアの外になってしまうので、それを含めた海域設定を指摘されるだろうということを想定していたので、それはむしろ私たちにとってはいい指摘だと伝えた。

国際的価値の件について、糸魚川ジオパークの事務局から地質学的な価値についてエビデンスを用意しておいた方がよいというアドバイスをいただいたので、島原半島 UGGp としての国際的価値をかなり全面に出した解説を私がした。そのため Geological Value のディスカッションは特に問題は出なかった。

この後おそらく出そうなりリコメンデーションとしては、ジェンダーバランスがある。ジェンダーバランスに関しての解決を検討してほしいということ審査員から現地で言われた。

ジオパークに関する収益事業について、前回のリコメンデーションに対しての答えがやはりちょっと不十分。独自に行政からの負担金以外でお金を稼ぐ方法で、どのような方策をとっているかという説明が甘いというコメントいただいた。そこは次リコメンドされる可能性がある。

委員長：収益に関しては自治体が主導している時はなかなか難しいという点もあって、日本としてどう対応するかというのを考えたほうがよい気がする。

事務局：今後の予定の同行者について触れておく。この後に予定されている白山手取川、伊豆半島、山陰海岸、阿蘇にも JGC から、それぞれ 1~2 名が同行する予定である。

委員長：それでは審議に入りたいと思う。審議は各報告 5 分程度、10 分程度を目安に審議をすることになる。

【議題① 国内推薦および日本ジオパーク再認定審査：南紀熊野】

委員長：最初は、議題①の国内推薦および日本ジオパーク再認定審査ということで南紀熊野の報告をお願いする。

委員：8月7日から10日にかけて調査員3名で現地調査をしてきた。このエリアは中生代生から新生代にかけて形成された付加体、その上部に前弧海盆堆積体、その後の火成活動によって火成岩体が分布しているというエリアになる。お手元の資料の調査結果一覧をご覧いただきながら説明させていただければと思う。

まず過去の調査の指摘事項についてはそこに出ている通りで、4年前の指摘事項については改善されたもの、それから△を付けているものは改善途中である。実際にこれについては、今回調査結果でそれぞれチェックしてきたので右側の箇所の調査結果のところで説明をする。

主な評価点としては、2019年にジオパークセンターが串本町の潮岬の所に開館した。展示機能も非常に充実しており、広くてとても良い建物だった。事務局機能の一部移転であるとか、館内のガイドによる案内やツアーの受付等を行って充実した活動拠点となってきているというところ。

協議会事務局に JR からの出向者が 2 年契約で来ており、近畿圏駅構内で PR や「銀河」などの観光列車、サイクルトレインなど列車を使ったいろいろなイベントが生まれている。民間の方が行っているのも、どうやって事業をアピールしたら良いかなど、PR 活動に積極的に働きかけをやっている。そういう意味では良い相乗効果がでているものと思われた。

コンテンツの一つになると思っているが、筏下りのツアーに参加した。一時間ほどのかなり良いツアーだ。舵を取る筏師の方々は岩肌や地質について非常に豊富な知識があるので、ツアーとしては楽しかったが、ジオガイド的なところをしっかりと研修していただいて、そういったところの向上をされるともっと良いものになるのではないだろうか。

最近の研究で橋杭岩の転石は津波石であるということをつらでしっかり説明されていた。これは後日の話になるが、今月になって津波石というのは宝永地震よりも非常に巨大な力がないと動かないということでメディアに取り上げられた。新聞、テレビに取り上げられたことでさらにここは非常に良いジオサイトとして発展するのではないかと考える。

高校生の防災や環境への取り組みも非常に活発で、2点ほど発表いただいたが、そういったところも成果が出てきているのではないかと思った。

一方で改善を求める点としては、やはりここは国立公園や文化財など色々とあって、ジオパークのエリアがしっかり分かりにくいのが一つある。それから、海岸線には実際には海岸エリアのジオサイトがあるが、境界の引き方をもう少し地形に沿った形に引いてしてほしいと思った。

これはたまたまなのか分からなかったが、ガイドの方の説明を色々と聞いたが、地質学的な価値についてもう少ししっかりとした説明が必要かなと思った。例えば、どうしても世界遺産の熊野古道寄りの説明になってしまっている。本来はジオサイトとしても色々と面白いエリアがあるので、そこの説明を少し工夫してほしい。

それから、解説板についても、事務局の方も色々と改善しなければならないというのは報告されていたが、やはり我々が見ても非常に分かりにくい。例えば露頭の説明があるが、どこの説明をしているのか分からない等、解説板についても整備・改善が必要だと思ったところ。

それから、ラムサール条約湿地帯に登録されていて、世界で一番北に位置するイシサンゴ類の群体があるといった点で非常に良いエリアで、しかもそこに海中公園があり、そこではウミガメを飼育しながら繁殖することに世界で初めて成功しているエリアでもあるが、そこの連携がまだ出来ていない。非常に良い施設だが、連携の相乗効果をもっと高めていく必要があると思った。

保全計画については、協議会で熱心に審議しているが、実際にどういった保全が行われているかが示されていないかった。

マーケティングについても、研修旅行等で色々とコメントをいただいたりしているが、それをどう生かすかというところまで盛り込んだものがまだ見受けられなかった。

ジオパークセンターが出来て、運営には2名の専門員と2名のガイドが常駐しているが、ジオパークの中心となっているジオパーク室がある県庁からの出向はない。その人たちが色々な所で指導をしているが、そこら辺のところは乏しい。

捕鯨については、誇りや文化であったり、生計を伴うということで皆さん色々と頑張っているが、単にそれを守るというだけではなく、自分たちがどういう風に生態系に向き合い、どう対応しているのか。例えばこの前聞いた話だと、親子連れの鯨は捕らないなど、そういったことも取り組まれているので、回遊の状況がどうなっているのか、どういう生態系になっているのか、そういったところをもっと外にアピールできるような形を取ることができれば良いのではないかな。また、地元の子供たちにも捕鯨に対してどういう国際的な見方があるか等、伝統と現状の正確な情報をしっかりと伝えてあげて発信することが必要かなと思う。

我々の結果としては、国内再認定については再認定でよいが、今言った改善点のことを考えると国内推薦は見送りかなというところがある。

委員長、補足があればお願いします。

委員長：ほとんど仰っていただいたが、エリア外に事務局があるというのは世界的にも異常。そういうのは世界の審査をした時につつまれるところなので、それに対しての見通しはきちんと示してほしいというのは強く感じた。

捕鯨については、報告書ではほとんど触れてはいないが、この地域が UGGp に申請した途端に世界の目に晒されるのは明らかだと思うので、それについて自分たちの姿勢をジオパークとしてどうしたいかというのを示さないと難しいと思った。物足りないのに加えて、今の二点を鑑みるとまず見送りでしょうということ

とで、我々の中で一致した。

これに関して、議論、質問をお願いします。

委員：一個だけ質問だが、ラムサールの取り組みについてだが、この地域は国立公園になっており、このジオパークを立ち上げる時に国立公園のほうにも区域を拡張したり、ジオパークと同じように研究員を出したが、実際の最近の状況として、国立公園の取り組み、利用面・保全面での連携についてはどのような状況なのか。まだまだ強化が必要な感じなのか。

委員：事務局に海中公園の専門員の方を入れたが、まだまだ連携が取れていないということがあって、もう少し全面に出すような積極的な展開がほしいというのがある。

委員：承知した。

委員長：海域のエリアを聞いてもよく分からない。どこまでジオパークに入れているのか尋ねてもすぐ答えが返ってこない。そこでジオパークが取り組みをしているというのはまだなくて、契約は結んでいないが、そのパートナーのほうに任せているという感じ。

委員：委員長がまとめられて、エリア外に事務局があること、それから捕鯨についての説明の仕方に問題があることが分かった。もう少し気になるのが、今後改善すべき点の2番で、世界的価値についてちゃんと説明できないというのがかなり深刻な気がしたがいかがか。

それともうひとつ、報告書の書き方だが再認定用で書いている。なぜ国内推薦ができないかについて、国内推薦はこういう理由でできない、だからこういう改善をしてくれという内容で、それに続いて国内再認定の課題を書かれたほうがよいのではないか。受け取ったときに、一体なぜ国内推薦がダメなのかというのが分かりにくい気がした。

委員：まず一つ目のご質問だが、例えばユネスコ世界ジオパークとの比較を我々はほとんど聞かれなかった。ガイドの方も色々と説明していただいたが、その認識が本当にそこまで至っているのか。ようするに自分たちが世界ジオパークを目指しているのだとすると、世界ジオパークと南紀熊野ジオパークというところ、あるいは日本国内でも室戸はユネスコ世界ジオパークになっているわけで、そういった所と何が違うのか、あるいは自分たちが持っているものは何が一番良いのかというのをもっと具体的に説明していただきたい。個人的には、非常に良いジオサイトが色々あるが、それをうまく説明しきれないというのが私の印象。

報告書の作り方については、私というよりは事務局と相談してどういうふうにしたら良いのか、確かに国内用の審査と世界推薦の話が2つあるので、どこかで切り分けて書き込む形にしたほうが分かりやすいかと思う。

委員長：少し工夫はするが、国内の認定・再認定の申請書については、すべて世界の基準に則っているので、ここで書いてあるのが世界推薦する上でも通用すると思うが、確かに切り分けが分かるように何か工夫したいと思う。

その他はあるか。

委員：言い忘れたことがある。パートナーシップの件だが、和歌山大学や JAMSTEC 等といくつか協定を結んでいるが、宿泊や旅行関係の事業者の方々とは連携は取っているが、協定書のところまでは中々進まない。66社程の色々な事業者と連携を取っているが、協定の有無が今後ネックになると思ったので、もうちょっと良い協定を進めていただきたい

委員：公開プレゼンの時に、委員の方の質問に対してはぐらかすような「現地でお伝えします」みたいな答えがあり驚いたのが印象に残っている。それについての印象は変わることはなかったということか。

委員：正確には覚えていないが、例えば計画書のことを言ってみるとまだ協議中であるとか、そういったところで即答は出来なかった。要するに、改善途中という感じ。

委員：領域の問題だが、奈良県の十津川村の一部が含まれているが、ユネスコの審査員が来た時に領域に含まれているところは全て連携がとれていて、ジオパークとして運営出来ているかということを見るが、この奈良県十津川村の一部のエリアに含まれている部分はちゃんとジオパークと連携がとれているのか。マネジメントボディも含まれていないのでかなり問題で、そのあたりはいかがか。

委員長：これは全くアリバイ的にいれているので、協議会にも一切入っていない。ただ、話し合いはしていると言っているの、それが少し見える形にしてもらっておかないとまずい。大変、有意義な助言をありがとうございます。

その他なければ、だいたい時間通りなので判断をしたいと思うがよろしいか。調査員からは見送りという提案だが、これについて反対や保留の方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：皆さん見送りということではよろしいか。全員一致で見送りにしたいと思う。

国内再認定については認定にしたいと思うが、反対や保留の方はいるか。

委員：微妙な気がする。根拠としては、領域の問題とマネジメントの問題がかなりあるので、その改善を求める意味でも2年間インテンシブにその辺を条件付きにさせていただけたらよいのではないか。

委員長：条件付きだという意見が1名。これをサポートする方はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：いないので、残りの方の大勢の方は4年間の認定にしたいと思う。

以上で、南紀熊野については審議を終えたいと思う。

【議題② 日本ジオパーク新規（エリア拡大）認定審査：霧島】

委員長：引き続き、議題②のエリア拡大の霧島について報告をお願いしたいと思う。

副委員長：霧島の報告をさせていただく。

今年の8月16日から19日まで調査員3名で霧島に入った。霧島ジオパークは領域拡大ということで、新規認定の対象ということになっている。実際には、以前、2018年に2回目の再認定を受けている。それも含めて今回エリア拡大の対象地を訪れながら色々なジオの価値についても現地で調査してきた。

調査結果一覧にまとめてある。過去の審査の指摘事項は7つあった。この中で、構成市町の連携と、霧島を中心とした自治体の連携体である環霧島会議との一体化や、運営体制の強化をして下さいといったような、特に運営面を課題としていた。

今回エリア拡大になったことで、湧水町が2022年3月に協議会に参加をして、全部で霧島を囲む5市2町の全域まで範囲を拡大した。これまでは各自治体が霧島火山周辺のみをエリアにしていたが、全自治体の範囲を拡大化して、湧水町と共に5市2町ということでエリア拡大になった。

従って、従来の霧島ジオパークから3.3倍の広さになったということになる。それと同時に、霧島ジオパーク全体の基本計画とアクションプランが3月に制定されている。

主な評価点として、これまでの指摘事項に関しての対応がほぼ着手されてある。これはエリア拡大を通してそういったところのケアが出来るようになったということと、湧水町のジオサイトを2つ巡ったが、火山活動を間近に見られるような温泉地や非常に美しい湧水地等があり、霧島ジオパークの魅力が高まったので

はないかと思う。

それから懸案だった、環霧島会議と霧島ジオパークとの連携に対しては、調査が終わった後の9月に環霧島会議と霧島ジオパークの幹事会が開催され、霧島ジオパークに環霧島会議を吸収合併して、事務局体制も他の自治体の職員を含めた形で強化をするという話になった。これは来年以降ということだが、一つ大きな解決が決定されたと思う。

霧島は前回の調査でも非常に特徴的だったのが、地元の多様な事業者の方たちとの連携が進んでおり、今回ジオパークの立地を生かしたカヤックやロングトレイル等のアウトドア系の事業者との連携を見ることが出来た。若い事業者がジオパークの中で活動をしていることは、今後、コロナ時代の新しいツーリズムの可能性も含め、ジオパークのさらなる活用に可能性があると感じた。

パートナーシップの協定に関しては、鹿児島県内の教育施設や博物館、国の青少年自然の家、埋蔵文化センターや上野原縄文の森で書面を交付して協定が結ばれていた。上野原縄文の森は、入口に連携協定のパネルが掲げられていた。

宮崎県都城市の霧島酒造も、近々に書面で協定を結ぶ予定であるということでも話をうかがっている。霧島ジオパークでは、地域の方たちとパートナーシップの協定がしっかり結ばれている。さらにジオパークにはビジネスチャンスがあると思われる事業者の方たちもいて、VRで霧島の山が見られるアプリを作っている会社の紹介もあった。いずれにしても地元事業者の皆さんが頑張っているという事を感じられた。

改善を求める点については、今回調査後に霧島ジオパークの体制が改善される方向になったので、それをきっかけにしっかりとジオパークの運営の体制を強化して欲しいというところ。特に事務局体制が霧島市の職員4名のみで運営されているので、これを早く拡充と強化をしてほしいということを目指している。

また、エリア拡大をしたので、構成自治体やガイド団体と協同して、エリアが広がった分の保全や管理をしていく方法を早期に検討して欲しいといったようなことも指摘した。また、広がったエリアのヴィジビリティ、可視性についても少し検討してほしいという事を言っている。火山災害以外の自然事象の影響について、例えば洪水などの多様な防災を進められたらいかがでしょうかという話もしている。

教育活動は今、事務局が出前で出動しているので、今後はガイドや地域の方たちと一緒に協働して、人員の問題を解決することも重要ではないかということをお話した。

ジオツアーだが、商品化で苦労しており、まだ出来ていないというお話があった。これも広がったジオパークのテーマを踏まえながら新しいジオツアーの開発をしていただければと思う。

結論としては、エリア拡大によって霧島ジオパークが火山だけではなく、火山を取り巻く人たちの暮らしを含めて多様になってきたということと、ジオパークを運営する組織が今後改善されていく見通しが立ち、皆さんで頑張っていけるということを確認できたので、今回のエリア拡大に関する新規認定については認定で提案させていただきたいと思っている。

委員長：一緒に調査に行かれた2名にもコメントをお願いしたい。

委員：コメントだが、エリア拡大をしたことによって、各構成自治体と民間業者、観光協会も含めてどういふふう融合したツーリズムを展開していくかというのを今後見ていく必要があると思う。

ただ、すでに都城市のサイクリングマップなどについては行政区の領域を出て展開するなど始めているので、そこにジオパーク的な観点を取り入れながら例えばダウンヒルで、火砕流と一緒に走り下るとか、そういったところを入れていただくと、なんとなくサイクリングにジオの要素を入れられるんじゃないかといったアドバイスもした。

委員：環霧島会議では防災のほうでは動いている。それと一体化するというので、一応これからとは言いつつ、組織強化につながると期待している。

一方、エリアが非常に拡大したので、うまく運営しないと中々まわらないこともあるので、組織を拡大して人をたくさん使う以上、成果は求められてくると思うので、委員がおっしゃったような連携による霧島のネイチャーツーリズムの魅力だったり、実質的な収益につながる活動が出来てくるかといったことをやっているかどうかということだと思う。

そういう事を応援する意味でもエリア拡大をして霧島ジオパークとして認めたいと思う。

委員長：質問等あればお願いします。

委員：3.3 倍に広がったということで、おそらく国立公園の区域から外に広がったということだと思う。そこを利用の質を高めると同時に、利用する事によって保全の質も高まるような、上手な協働の仕組みを作っていくことが大事だなと感じた。

ロングトレイルの話が良い点として指摘されていて、ロングトレイルは長距離自然歩道というネットワークが何十年かけて作られているが、あまり利用されていないということがあって、ロングトレイル歩道を地域として活性化していこうという動きが非常に大事になってきている。九州自然歩道はその先陣を切っている所であって、大変熱心なところ。ロングトレイルとジオパークの連携は可能性がすごくあると思うので、霧島からロングトレイルとジオパークの利用の連携モデルを発信していけたら非常に良いと思った。

副委員長：実際にイベントのような形でロングトレイルを利用したものが実施されているので、先程言ったカヤックをはじめとするアウトドアのアクティビティをジオパークに組み込んでいくところがジオパークの方向性として持っているのを確認できた。

委員長：その他はあるか。

委員：確認だが、領域が非常に増えたということで、サイトの数も増えたと思う。それによって、様々なジオダイバーシティができる。どんな見所が増えたのかということと、国立公園のエリアから広がったということによって保全体制がちよっと心配になってしまっているの、その辺の保全をどうしていくのか、分かる範囲で教えていただきたい。

副委員長：エリア拡大に伴って、これは前回の指摘でもあったが、ジオサイトの整理とサイトリストをきちんと作ってくださいという事でお願いをしてあった。今回の調査でもちゃんとサイトリストを掲げている。拡大したことで、地形・地質サイトが48、自然サイト18、文化サイト55、ビュースポット51というような形で、各市町で整備をされている。

新しく入った湧水町については、地質サイトのところで栗野岳温泉の八幡大地獄の1カ所が入っている。自然サイトは丸池湧水や水源、水に関わる所が自然サイトになっている。

霧島市が圧倒的に色々なサイトが多いが、今後、他の市町と協働しながら、自分たちの市・町だけ管理しているという体制にならないようにやっていくということになると思う。そのことは、指摘事項で、拡大して増えた色々なサイトの管理運営を事務局や市町だけで囲い込むのではなく、ジオパーク全体で取り掛かれるようにしてくださいと記載した。

委員：大切な事だと思う。

委員長：ほかに質問のある方はお願いします。

委員：2点ある。1つは領域の確認だが、拡大したことによって霧島市の一部組み込んでいると思うが、この海域の取り扱いはどうなっているか。それとも陸域のみなのか。地図を見ると海域は桜島・錦江湾と重複しそ

うな感じ。提出されている地図だと分かりにくい。

副委員長：国分平野が少し入っている。

委員：もうひとつ、将来、桜島・錦江湾と一緒にユネスコ世界ジオパークを目指す流れは継承されているのか。今回はその辺りは審査の対象ではないと思うが、これだけ広げるとかなりマネジメントが問題になってくると思うので、その辺りの見通しはあったのか。

副委員長：今回は、桜島・錦江湾との合体の話題はほとんど出なかった。取りあえずエリア拡大をして、広がったエリアを自分たちでしっかりと運営していくという意思表示を今回の審査で強調したということで、今後その話が出ると思うが、取りあえず今は広げた分についての話題だった。

委員：桜島・錦江湾の人が同行はしている。

委員長：やはり将来ビジョンはきちんと示すべきで、桜島・錦江湾も一緒になって世界申請することを目指して領域拡大してきた。それに合わせて霧島のほうも拡大してきた。その二者が会って相談しているはずだけどうまくいってないように思うので、桜島・錦江湾も含めた将来的なビジョンを作るようお願いしたほうがいい気がする。

副委員長：承知した。将来を見据えて桜島・錦江湾とも話し合いをして連携の検討を始めてくださいということではどうか。

委員長：そう。いずれにしても申請する時は事務局が一体化しなければならないし、お互いに連携した活動を活発化していかなければならない。そのためのステップが見えないし、もちろんプログレスレポートにもないので指摘してあげたほうが良いと思う。

副委員長：承知した。

委員長：その他はあるか。

もしないならここで採決したいと思う。霧島のエリア拡大の新規申請について認定したいと思うが、これについて反対の人はいるか。

一同：(意見なし)

委員長：全員賛成ということで認定ということにしたいと思う。

記者発表資料作成

【議題③ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認：洞爺湖有珠山】

委員長：議題③に移りたいと思う。ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認ということで、洞爺湖有珠山。報告をお願いします。

委員：洞爺湖有珠山の現地確認に7月末に調査員2名で行ってきた。

結論から言うと、非常に整備が進んでいる。

今回ここで挙げた項目は、前回のユネスコ世界ジオパークのリコメンデーションに対する指摘内容の概要とその対応を星取表で示した。前回のユネスコ世界ジオパークの審査では3つのリコメンデーションがあり、それぞれについて洞爺湖有珠山ジオパークのほうで非常に良い対応をしている。

ヴィジビリティに対する改善や、前回の世界審査では無形遺産に対するリコメンデーションが多数あった

ので、それに対する活動を洞爺湖有珠山ジオパークが積極的に進めていた。

世界的にも評価されている火山マイスターの活動に対する普及啓発や、災害遺構を活用する新たなインフラ整備の状況の検討についても対応済みである。

調査結果についても評価点としては、とにかくヴィジビリティに関するものが非常に高い。例えば、看板はエリア内に 361 カ所あり、さらにはノベルティグッズやパンフレット類を 400 カ所程の事業者配布している結果、エリア内でもジオパークの視認性やイメージが向上してジオパーク活動に積極的に関わりたいという人が増えてきた。これは非常に大きな良い変化だと思う。また、配布されている冊子類もきちんとした内容に基づいているものが多いので、地域の方々が地質学的価値を学ぶことが出来ている。

無形遺産に対する活動の評価点として、実際にアイヌ民族の地域の団体と連携したり、世界文化遺産がそこにあるので、その文化遺産の施設のスタッフと連携して、実質的なイベントの共有や活動が展開されているという点が評価されている。

JGN、GGN のネットワークにも積極的に参加して情報を発信している他、地域内のネットワークとしてこれまで洞爺湖有珠山の中で比較的活動が停滞気味だった伊達市の飛び地の大滝村エリアでジオパークの活動が広がり始めており、エリア全体でジオパークの活動が活性化しているという印象があった。これがおそらく洞爺湖有珠山で展開されている非常にデザイン性の優れたロゴマーク、パンフレット、マップを積極的に広めた結果ではないかと考えている。

その中で、世界審査に向けて対応したほうが良いと思われるものを 5 点挙げた。

1 つ目は洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパークの国際的価値について。プログレスレポートで挙げた評価点のうち、昭和神山の形成プロセスについては国際的価値としてアピールするべきだが、それがレポートの中であまりきちんと書かれていなかった印象があった。ここはもっときちんとアピールをしたほうが良いとリコmendさせていただいた。

プログレスレポートの中には現在、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会が推進しているマスタープランがあるが、その概要がほとんど書かれていない。どういう目的に基づいて活動を推進しているかという事をもっと丁寧に紹介したほうが良いのではないかとこのリコmendをしている。

3 つ目だが、マスタープランの中に、アイヌを含めた先住民族の活動というものがあるが実は書かれていない。これは現地の事情でなかなか書くことが難しいということが分かったが、いずれはちゃんと位置づけをしていく必要があるというのは提案してある。

4 つ目は議論が必要かもしれないが、JICA プロジェクトの受け入れを非常に積極的にやっているが、そこで研修に来たコロンビアの人たちが JICA 研修をきっかけにコロンビア国内のネバド・デル・ルイスという非常に有名な火山泥流災害があった地域でジオパーク活動を始めたいという動きが出始めている。これが洞爺湖有珠山のほうで研修に来たことがきっかけで始まったということであれば、それがアピールできるのではないだろうか。

これが一番大きな問題だが、常勤の地球科学者が現地調査の時にはいたが、調査が終わった 3 日後に退職してしまった。今、協議会の中には常勤の地球科学者がいない状態。洞爺湖有珠山のほうで、一生懸命ルート活動をしているが、このところについては世界の審査で非常にきつく言われる可能性が出てきている。「雇用の検討」というやわらかい書き方にしているが、実際には大きな問題になる可能性がある。

なので、全体としてのリコmendーション、さらには地域に展開される活動というのは非常に優れたものがあるが、特に地球科学者の雇用についてはまた問題になる可能性がある。

4番のコロンビアでのジオパーク活動も含めてご意見をいただければと思う。

委員長：ただ今の発言に対して質問、コメント等をお願いする。

事務局：JICA研修を洞爺湖有珠山は何度も受け入れていると思うが、この4年間で受け入れた実績がどれくらいあるのかという事と、コロンビアにとって始めた1つのきっかけになっているが、ちょっと書きぶりを工夫しないとあまり大きく出すぎると少しマイナスポイントになる可能性があるので、そこを気を付けなければいけないと思う。確か委員長の教え子がそこで活動されているので、そちらの情報も入ってきているので過去5年間の動きかどうかを見定めてからリコメンドしたほうがいいのではないかなと思う。

委員：承知した。特出しして書くと目立つので書き方としては気を付けなければならない。無理して表に出すことはないという気はする。

ただ、JICA研修の受け入れについては、コロナの関係でこの2年間ほとんどなかったという事だが、そのさらに遡る2年分に関してちょっと実績は分からないが、それを含めた受け入れ対応数は報告いただけと思う。

委員長：JICA研修を確かに長年やっていることは間違いないので書くのはいいと思うが、ここでは、JICAと連携して場所を提供し、火山マイスターが講師参加しているという形である。火山防災に特化したこのプログラムの中でジオパークの良さに気付いた、昔、私のところにいたJICA研修生が中心となって、コロンビアのネバド・デル・ルイスを、コロンビアで初めてのジオパークとして申請する予定になっている。そういう流れは書いておいてもいいと思うので、背景を正確に書いたほうがいいと思う。

委員：承知した。

副委員長：質問だが、この一覧表の中の過去の審査の指摘事項②でアイヌ民族の色々な研究調査を紹介しているという一方で、改善を求めるところの③のマスタープランにおける先住民族の活動の位置づけの明確化というところがちょっとよく分かりにくいので教えてほしい。

委員：アイヌ民族に関するリコメンデーションをきっかけに、地域の民族団体と民俗学の研究者が連携して地名に関する研究をまとめている。それを形として「かわのよびなを旅する」という冊子絵本を出している。

これが成果だが、これも私が現地で聞いたが、どうしてアイヌの話がプランに入っていないのかというのは、アイヌ民族と協議会との間の信頼関係がまだ十分に構築されていないからだという。なので、計画の中に団体等の関係性を明記してしまうと話が先走りしそうで怖いので、まだ明記できないという話だった。洞爺湖有珠山は非常に長い時間をかけて地域の人と信頼関係を構築しながら活動を進めてきている。徳川家康戦法。

副委員長：地域の方々が動くまで待とうと。

委員：そう。とにかく向こうから「やりたい」と言わせるまで待つというやり方。今の段階では、足繁く団体の責任者と信頼関係を構築している段階。将来的に次のプランには盛り込んだほうがよいだろうというリコメンドは、もしかしたらその活動の後押しに、「書かれていないことはダメだ」という書き方をすると、それまでの関係が気まづくなる可能性があるので、確かに相反するコメントではあるが、地域の状況を踏まえて書かせていただいた。

副委員長：承知した。

委員：火山マイスターに興味があるのだが、火山マイスターがジオパークのガイドの役割も果たしているのかということと、地元の人を中心なのか、何名くらいなのかといったことを教えてほしい。

委員：火山マイスターはジオパークのガイドも兼ねている。ただ、ジオパークの認定ガイドとはちょっと違う。

実際、火山マイスターを認定しているのはジオパークの協議会になるので、名前は違うがほぼジオパークガイドと置いていただければ。

ただ、普通のジオパークガイドと違うのは、何か有事が起きた時には防災減災のための活動を展開するところが非常に大きな個性になる。

火山マイスターは57名在籍し、ほとんど地元の方。中にはガイドの方もいるが、ほぼほぼ地元の方。実際に有珠山が40年に1回くらい噴火をしているので、その噴火の災害を経験している人が多い。

委員：承知した。

委員長：その他はあるか。

事務局：リコメンデーションの順番だが、本当は5番が一番大事だが、ここは十分分かっていることで、解決に向けて動いているから5番はあとということで、今回はこの順番で通知書に入れたほうがよいのか。

委員：これは現地とのやり取りの結果、この位置にしている。地域も深刻にとらえている。順番は低いが重要性は認識している。一番目に書いたほうがいいのであればそうする。

委員長：通知書では1, 2, 3, 4, 5というのは特に順番付けではないという理解でいいか。

委員：そう。箇条書きに近い。

委員長：承知した。いずれにしてもアドバイスミッションなので、そんなに強制力はないと思う。

前回、イエローを受けたのは専門員がいないということが決定的だったので、似たようなことが起こらない様に是非頑張っていたきたいと思う。

他になれば次にいきたいと思う。

【議題④ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認：室戸】

委員長：次は室戸。報告をお願いします。

委員：先程の厳しい事前確認の調査を先週受けた側の調査員がたいへんフレッシュな発表をしていただいた。

こちらも台風ではなかったが、羽田空港の雷雲等などがあり、到着が数時間に遅れるということがあったが、高知から室戸への移動の時間にプレゼンを受けるなど、そういった形でカバーをしてスケジュール通り進むことが出来た。

ここにある最初の過去の審査の主な指摘事項、問われたところは前回のユネスコ再審査の時のコメントである。コミュニケーションツールが不足している、ジオサイトデータベースのアップデート、保全の考え方の整理、西山大地と農業など地質遺産と他の遺産をつなげるガイドの養成、新たなジオパークルートとサイトの開発検討、ジオパークセンターの展示改善、海洋部分を含んだエリア拡大の可能性検討、パートナーの明確な基準を含むパートナーシップ戦略を策定、これらについては全て行われていた。ただ、プログレスレポートの書き方が大変分かりにくいので、私も最初プログレスレポートしか見ていない時は大丈夫かなと思ったが、現地で確認した結果は全て対応が出来ているということがあったと思う。

次に評価点だが、室戸はボトムアップということを当初からアピールをしており、これが「守る」「学ぶ」「稼ぐ」「広める」「もてなす」といった5つの推進チームの地域住民の参加や、前回の審査を受けた後の4年の実行計画、これらの策定に地域の方の参画が大変大きな割合でされており、継続的にボトムアップの活動を推進している。高校生から80代までによるプレゼンなどからも幅広い年代の方の参加が進んでいると感じた。その中には地元の方も移住してきた方もいる。

ユネスコの国際審査の指摘を受けて連携協定締結ガイドラインを策定した。すでに連携協定を2021年に

行っていた高知県立室戸高校との協働が非常に強く長く行われており、それが地域にも良い影響を与えている。学校自体の力も強めている実態も観察した。

幅広い年代の所にも関わるが、おそらく 30 代前半だと思うが、クルージングツアーを実施している業者さんや、民宿やカフェを経営している方、もともとは帰国子女である国際金融エキスパートのような方が民宿経営をされているが、その人が協議会の理事になり存在感を示している。

地元の備長炭生産者の方の活動が前回の審査の時もかなり強烈に良い印象を与えていたが、さらにビジネスを展開しており、伝統的な炭というところから大変おしゃれな料理や、高知県もかなり出資しているグランピングにも乗り出しており、雇用創出に確かに貢献している姿を見させていただいた。

ガイド団体では、事務局長に年収支払いの基盤を作っており、新しく就任した女性の会長さんのもとで定期的な勉強会などを行っている。コロナ禍の中で、オンラインを使って今後も使えるような防災や国際交流で展開していた。

以前は 1 回 1 回対応していた環境・防災学習ツアーを広域 DMO と連携してある程度パッケージ化することで大変集客と収入も増え、現地の負担も軽減され上手い具合に進んでいる。

文化的側面についてのさらなる活動は、先程言った炭焼きや町並み保存があるが、「お遍路」についても知識不足で知らなかったが、空海という名前の由来となったというインパクトのあるエピソードがあるが、そういった事はツアーにあまり展開されていない。まだまだやれる事がたくさんあるといった印象。

改善を求める点では、細かいところはたくさんあったが、基本的には上手く対応されているので、前回の指摘に関連した事をここに 5 点書いた。

室戸の研修の時に、私が「なぜ三角なのか」と言った事がきっかけとなり、質問した人が来るから分かりやすい説明を考えましたとって見せてくれたものが私にはとても分かりやすかった。具体的には、固定したタオルにしわをよせて半島ができる様子を示したり、100 枚くらい重ねた新聞紙を褶曲させて水につけて見せて「上からみると三角」といった説明があった。素人にとってはすごくイメージとして捉えやすいものが出来ており、今後そういったものをイラスト化したり、映像化したり、外部の方と共有したりできたらいいなという事を含めて、まだそれが成されていないので地域全体と個々のサイトの地形や地質、石などを全体的に捉えるような事をもっと印刷物の改訂がある時などにはやってほしいということを行った。

多言語表記における正確な情報伝達についての見直しについては、細かいところではあるが、ユネスコの指摘のなかに英語を改善するべきというのがあったので見直しをした。例えば「変動体に生きる」というとても重要なキーワードだが、変動体という言葉は私がおその場で見た限り 4 つあり、同じことを言っているのが伝わっているのかなといった疑問があった。英語のものしか分からなく、他の言語は分からなかったが、そういったことを見直すことも必要ではないかと思った。

世界ジオパークセンターの常設展示については、来年度改修計画を作るようになっており、今は、他のジオパークの施設を見学に行ったりしている段階だが、それについては前回の指摘があった他の地域の岩石標本の展示、ランニングコストを含めた検討というのは、デジタル展示がたくさんあるが、私たちが行った時にほとんどがちゃんと動かなかった。直すにもすごくお金がかかるとの事で、これは少し問題だなと思った。展示の改修や補填についても含めて検討してほしい。

先程の防災活動のツアーに行ったりしているが、「強化」と書いたのは、南海トラフが近いせいで、現地のガイドさんに聞いたところ、地震発生 5 分で津波が来る地域が結構あるようで、どのツアーにも必ず「もし今地震が起こったら」ということで説明するところから始まるが、5 分で津波が来られたら助からな

いと思った。評価は柔らかく書いたが、本当にリアルなところで、外部から来た者として実際対応できるのか気になったので「強化」と表現した。

津波シェルターはガイドしていただいたが、津波タワーのほうは素通りで説明がなかったのが疑問に思った。ただ、それと共に台風については効果的などころも含めてかなり蓄積があることが確認できたので、こちらについてもプログラムとして国内、国際ネットワークに発信してほしい。

先程、お褒めがあった洞爺湖有珠山のデザイン性が優れた物がたくさんあるという点は大きな力になって、特にビジュアルアイデンティティがもっと強化されれば魅力をもっと国内国際にアピール出来るので、そういったことをやってほしいといったところである。以上、報告とさせていただきます。

海洋部分、ジオパークのエリア拡大については、検討したのは分かった。深く検討した上で、前回の指摘もあくまで可能性として指摘したということだったが、正直言って、検討を継続させることは出来ないかと伝えてみたが、限られた人員の中でそれをやったからといって、ジオパークの活動に新たな付加価値を見出すことよりは事務的な対応が難しいという本音と、その10%以内で理屈に合うような拡大のプランがどうしても見えないとの説明で、これについては検討を継続するという言い方はしたくないというようなことを言われた。

委員長：ただいまの報告に対して質問、コメントはあるか。

事務局：最後におっしゃった海域のところは、現地調査が終わってから私も誰かと話したが、「継続していくという書きぶりにプログレスレポートはしたほうがいいですか？」と言われ、「そのほうがいい」ということを伝えた。他の地域の報告でもあったように、海域を含めることも検討することをユネスコから来た審査員が色んなところで言っている中で、ちょっとだけ検討したけど難しいからやめたというのはとてもネガティブに受け止められるので、そこに関するリコメンデーションは入れたほうが良いと考えている。

委員長：指摘の通りだと思う。

次の質問をお願いします。

副委員長：今の室戸の事務局体制は良好に運営されているのか。例えば、人員の問題など。ガイドさんも随分とシニアになられて、長いキャリアの方も多いと思うが、新入の参加の方など、運営している人の問題は室戸で何か気が付いたことはあるか。

委員：事務局長と会える予定だったが、事情があって会えなかった。今の事務局長はおとなしめな方で、リーダーシップを発揮するようなところをあまり見ることは出来なかったが、専門員の方が存在感を示しつつ、チームワークは良く出来ているなどと思った。

その中で、地質の専門家が新たに着任されて、色んな課題を真摯に受け止めて資料作りやPR活動などに熱心に取り組んでいる。文化のほうは弱いのかどうか分からなかったが、3人の専門員を有し、地域住民の関係も良く見受けられた。

副委員長：ガイドさんとはどうか。

委員：ガイドさんについては、高齢になっているという話が現地でも繰り返してきた。ガイド団体は60歳代が多く、30~40歳代は研修を受けることは多いが、実際にガイドに立つところまで至らない。なぜかと言うと、忙しさであるとか、年代が上の方とコミュニケーションが取りにくいといったことや、そういうことも含めて、研修を受けているのにもったいないですねということの話をした。英語のツアーをできると言っていたので、そこら辺は若い人たちを呼び込む。高齢化については色んな意見があるので、ガイド団体の事務局長は室戸ジオパークセンターのカフェをやっている方。その人の意見は、急に若返りは無理だから60歳

代でデビューした人が10年～15年やってくればそれでもいいという考えがあるということを受けこうアピールされる。高齢化を問題に思っていたシニアの方たちが、「若い人たちも大切だが、そういう考えもあるよね」という気持ちになっている。地域全体の高齢化が進む中で、60代であっても新たなガイドの養成をする、そういう現実的なところもある。

副委員長：承知した。

委員：個人に対する批判ではないが、地元の新聞の取材が2回あったが2回とも国際交流専門員の方がインタビューに応える形だった。事務局長にそのコメント枠を渡すとか、順番に対応する方法もあってよいのではと調査員間での感想としてはあった。

委員長：その他はコメントあるか。

委員：海域についてだが、他の場所でも海域の場所の指摘がされていると思うが、ここは室戸阿南国定公園になっており、全国の国立公園の海の取り組みを強化しようというところで、海の大事なところを海域公園地区というのがある。それは保全も含めるし、海の利用保全を高めていこうという地域指定で、それを今後国定公園は都道府県の領域となり海域の設定を積極的に拡大に展開していく政策があるので、この現場がそれにマッチした現場なのか分からないが、そういう仕組みを使ってジオパークを国定公園地区に上手く繋げることで海域への拡大の一助になればなと思った。

委員長：地図には国定公園ときちんと書いてあるので、それを含めた領域にしていればいいのではないかな。

事務局：それは検討しているが、10%を超えてしまう。

委員長：超えてもいいのではないかな。

事務局：室戸はユネスコ世界ジオパークの中でも面積が小さいので、多様性とか周遊してツーリズムを伸ばしていくにも、もう少し拡大したほうがいいのではないかなという議論が以前から出ていて、どうせ10%を超えるので陸地も含めて1市でやらないようにするなどの検討してほしいというようなことをアドバイスはしているが消極的。

委員：見たところ事務局はそういう感じだった。市長さんは乗り気なようだが、11月に選挙を控えていて、その辺の全体の議論をしっかりとやったかどうかというのを分からない部分はある。リコメンデーションの検討を継続する。

事務局：しっかり議論するように書いていただくのがいいと思う。

もう1点、研修会で取り上げた道路工事のことをもし良かったら報告してほしい。

委員：実は、事務局長と話し合った結果、ユネスコにわざわざ大きく報告しなくてもいいのではという印象だった。ただ、触れないわけにももちろんいかない。現地に行き、地元の有力者の市議会議員であった事業者の方や地域の方、事務局の方の話を聞いたなかで、今回だけではなくて自分たちは何十年も前からここは危ないと言っているのだとおっしゃっていた。国の補助金を使うので、ある程度先が見えたお金の使い方をしたというところから、道路は環流丘陵を突っ切るとちょっとだけ残る。その空間も難しいけどそこを削って、先程出た内陸を含んだサイクリングツアーのルートを設定していたが、休憩所とかトイレの設置などで削れて出来た空き地みたいな部分を有効活用しつつ、雇用も出来るし、調査もあつたりするので、そこを記録にしっかり残して今後のジオパーク活動に活用するというところで、ここは妥当な解決方法であるかと思う。実際に危ない箇所が何か所かある。

事務局：調査や皆さんと話し合う時間を持つことで工期を遅らせたと聞いたように思うが、そうではなかったのか。

委員：工期を遅らせたというよりは、検討段階のところを増やした。資料や説明を聞くと、実施するところは変わってないと思う。補助金を使わなければずっと出来ない。

委員長：ここにあまり時間をかけられないが、報告書は書いていただいているが今の二点を含めてもう一回作成し直したほうが良いような気がする。よろしく願います。

どうしても追加があれば願います。

一同：(意見なし)

委員長：それでは次にいきたいと思う。

【議題⑤ ユネスコ世界ジオパーク審査事前確認：アポイ岳】

委員長：アポイ岳について報告をお願いします。

委員：率直に言うと、課題がたくさん残っている。

まず、前期調査結果一覧に基づいて報告をする。

前回の指摘事項は5点あった。1点目、GGNおよびAPGNに関する情報に関して、拠点施設やウェブサイト等での解説やプロモーションを検討することということで、これに関しては現地でロゴマークや情報発信を確認したのでこれに関してはクリアしている。

2点目、地質サイトのデータベースの定期更新と保全方針の検討だが、地質サイトのデータベースに関しては、Excelでジオサイトカルテという形で持っており、定期的に修正されているというのは確認された。一方、保全方針に関しては、まだ事務局の素案があがっているだけで協議会の中でオーソライズされたものではなかった。その保全方針も内容としてはとても不十分なもので、保全に関しては3~4割くらいで、残りは利活用についてなので他の計画と重複する記述が多かった。これに関しては再検討を求めた。

3点目、他のUGGpとのパートナーシップを通じて国際的価値をプロモーションし、ネットワーク活動に寄与することという点だが、まずパートナーシップ協定はどこにも結んでいない。国際的価値プロモーションに関しては、国内の山陰海岸や、海外だと香港などとパンフレット交換や資料交換などを行っていたが、人の交流はなかった。物の交流が中心で人の交流がほぼなかったので、人の交流を進めてほしいということをお話した。

4点目、マーケティング戦略の策定に関しては、様似町として観光戦略をコンサルに外注して策定をした。それをもってジオパークがマーケティング戦略はこれでと示されたが、中身は様似町に関するもので、ジオパークに関するものが部分的に含まれるもので、それをもってジオパークのマーケティング戦略と言われても、それはやはり不十分なので見直しをするように求めた。

パートナーシップ戦略については、戦略自体が策定されていなかったもので、これも早急に対応を求めた。

なので、前回の指摘事項5点のうち、3点ないしは4点が不十分な対応であったということになる。

今回の調査結果としては、評価点は、北米プレートとユーラシアプレートのかつて衝突したプレート境界というのがあり、それが新しいジオサイトとして公開され整備されていた。

アイヌ文化の普及啓発についてはアイヌ補助金を使って展示の拡充が行われていた。それによってアイヌ文化の普及啓発が進んだので、これについては評価したいと思う。

教育に関しても小中一貫の長期学習のカリキュラムが行われた。これも評価できるポイント。

自然観察会「ブラアポイ」の実施については、コロナ禍の中で小規模な自然観察会を開催した点においても評価できると思う。

高山植物の保存プロジェクトについてもずっと継続して実施しており、絶滅危惧種の保存に一部成功し始めているところもあるので、これも高く評価できる。

様似町には図書館、郷土館、ジオパークビジターセンターの3つの施設があるが、この3つの施設連携、協同の事業連携をするなどさらに深まっていた。

地元ホテルにアポイ山荘があるが、経営者が変わってジオツアーを開催したり、星空観察会をしたり、お土産物を開発したりするなど非常に積極的にジオパークのツーリズム開発に参加している。地元のホテルとの連携もかなり進んだ。ただ、パートナーシップがない。

このあたりは、この4年間の評価点になる。

改善を求める点については、

まず、前回の指摘事項への対応については、不十分な点が多いので、それをお願いしたいと思っている。

次の領域の見直しだが、実は海域にジオサイトがある。その海域にジオサイトが設定されているが、それが領域に含まれていないので、その見直しを協議した。協議したこれはおそらく来年の審査の状況とか来年の審査で同様の指摘はくると思うので、必ず対応するようにいいたいと思う。

プロGRESSレポートの自己評価表A・Bについてだが、今回提出されたものが不十分だったので、全面的書き直しをお願いした。なお、自己評価表の中身に関する理解も不十分なところがあった。特にプロGRESSレポートで問題だと思ったのは、ジオサイトの追加と削除が説明されていなかった点にある。そういった部分もきちんと書くようにとお願いをしている。

国立公園の国立公園化の議論も出てきているが、さまざまな事情があるようである。基本計画・行動計画については事務局案で素案のまま出されてしまったので、それをもう少し見直してくださいということで指摘事項に入れている。

また、新しいジオサイトの現場確認をした。看板はついているが、交通量が少ないといえ、少し安全管理が必要となる場所だったので安全管理の徹底ということと、やはり、かつてのプレート境界はという説明がかなり難しい。なので、その説明をもう少し分かりやすくしてほしいということをお願いしている。

ネットワーク活動については、やはりかなりまだまだ不十分なところがあるので貢献してほしい。

ジオツーリズムの開発については、このコロナ禍において日本のジオパークにおいて教育旅行需要が高まって儲かっている中で、ここだけ全くその動きを入れていない結果。それもコロナ禍における教育旅行需要のバブルについて情報すらキャッチアップしてなくて、そうだったのかという反応だったので、やはりツーリズムに関してはかなり課題が残るので、ここは力を入れて改善を求めたいということでこれを書いている。

全体的な課題としては、スタッフ育成に課題がある。ジオパークに対する理解不足や、最新教育のキャッチアップが弱かったりなどが見受けられるので、委員会として来年の審査に向けて少しフォローアップが必要なジオパークだと思っている。

委員長：課題満載の現状。ただいまの報告に対して質問はあるか。

委員：町として観光しなければならないとか、それとも観光を町作りの中心に置こうという方針があるのか。ないならジオパークは観光をやらないと意味がないので、無理にジオパークをやる必要はないというふうになってしまいがどうか。

委員：観光協会に少し動きがあった。かつては町の職員が観光協会の事務局長として派遣されており、町直営の観光協会が観光支援を行っていた。それが今度切り離して観光協会を独立させようということで、地元の

若い人が観光協会の事務局長になり、向こう3年間町の支援を得ながら独立をして観光を頑張ろうという流れにはある。ただ、町として特に観光でいこうという熱意は正直感じられない。

委員：今の場合は例えば、お客さんが来てもお金を使う所がない。そういうところも含めて何か作戦がない限り。あるいは、うちのジオパークは教育だけ満足だというならいいが。

委員：今回、観光戦略を立てたが、今まで様似町自体が自分たちの観光計画を持っていなかった。今回、初めてコンサルに外注して観光戦略を立てたという段階なので、将来から見たらスタートラインに立ったのかもしれない。

委員：何のためにジオパークをやっているのかよく分からないというのがここ何年かあった気がするが。

委員：その状況は改善されていない。

事務局：会長が変わられている。その辺りは、前の会長の路線を引き継がれているという印象を受けた。会長が変わったことで変化や期待できることはあるか。

委員：ない。基本的に前町長の踏襲なので、変わったからと言っていきなりやる気になったという感じはない。

「小さい町の身の丈にあったものをやる」といった感じ。

委員長：GGNの人と話してもアポイは何をしているの？というしばしば聞かれ、ほとんど存在感がない。委員会としてここをUGGpから取り下げを提案するというやり方もありうるが。

委員：去年の阿蘇とは違うアプローチをとらなければいけないなと思ってはいる。

委員長：先程聞いて分からなかったのは、国立公園の策定に絡んでくれるなどということか。それともジオパークが先行してリークするなどということか。

委員：取りあえず、何も言ってくれるなどということ。利害関係など調整しているので、ジオパーク側から国立公園化するのもう少しコミットせよみたいなリコメンデーションはあまり喜ばしくないみたいな雰囲気だった。

委員：本部の方か。

委員：採石場を含めた地域での調整の問題であると認識している。本当はジオパークが後押し出来る事がいっぱいあるが、今回、その辺を議論できるところがあまりなかった。

委員長：本来であれば国立公園の策定にもジオパークがコミットして一緒に地域を盛り上げていくという方向でなければならないはずだが、それさえも遮ろうとするのであればジオパークをやめたらという感じ。

委員：町長としては国定公園や国立公園化だとのっているが、事務局長が消極的な印象を受けた。

委員長：事務局長は誰なのか。

事務局：イタリアの会議などには行かれていた方。

先程の採石ポイントがあるからというのは、ジオパークとしてはそこそちゃんと議論すべきだと思うが、それに触れないのはむしろ問題だと思う。

委員：それを含めて来年のユネスコ審査を受けるのであれば、かなり手厚なサポートミッションが必要だと思う。

委員長：その他、質問などがあればお願いします。

委員：リコメンデーションの中で強調すべきことは、ユネスコ世界ジオパークに対する最新情報をきちんとキャッチアップするということ。そもそも第一段階として、最新のユネスコ世界ジオパークの情報のキャッチアップを強化というのをかなり全面に押し出した通知をしたほうがいい気がする。

委員：おっしゃる通りで、しかも今回現地審査に行った時に、最初にブリーフィングは議論の場として欲しい

が、首長たちがいらっしゃって実質的な議論ができなかった。調査行程中も、全然ファシリテーションがなかった。ただ行った先で人に会わされて、どういう意図でここを見せるのか、そういうプログレスがあったのかの説明すらなかった。最後は切り替えて、プログレスレポートの書き方講座や、他のジオパークの世界審査の審査員が来るからどこか一カ所は行って、どうやっているか見てきてくれというので、方針の問題もあるので、ここは行政一体型の運営を希望していて、法人化はおそらく難しいだろうということだったので、そこに対する説明やそのメリットを説明されなくて、前回の世界審査の時に同行したが、やはりそこでかなり議論になった。そこもクリア出来ていない。

さきほどのご提案通り、キャッチアップしてくれと書くべきなのだけれども、現地に来るから他のジオパークに同行して見てきてくれと伝えても昨日メールが来て行かないことになった、同行しないことになりましたということで、何かアクションすることに非常に消極的。

今回のタイの国際会議に関しても、現地参加もせずにオンライン参加。世界審査に審査員も派遣できていないし、非常に課題が山積している。課題を書いたところでそれが効くかということ、もっと実効性のあることをしないと難しいなというのは一つある。言い続けるのも大事だと思う。その辺はどうしたらよいか。

委員：書くしかない。

委員長：誰がキーマンになるのか。

事務局：キーパーソンはいるが権限がない。

委員：10年近いキャリアがあるが、ジオパークのことをキャッチアップ出来ていない。スタッフ育成の問題も抱えている。

委員長：深刻。全国大会に関係者は出席するのか。

事務局：出席する。

委員長：その人たちと面談をする。このままだと、辞退をしましょうと伝える。それくらい深刻だと。

それでは、アポイと室戸は宿題がたくさん出るがよろしく願います。

その他コメント等はあるか。一応、アドバイザリーミッションなので、再審査する必要はないのでこまめにする。

【その他確認事項】

委員長：次のその他確認事項に移る。それでは事務局願います。

事務局：本日、この会議に使われた調査結果一覧表だが、これは昨年のJGCでも公開資料という扱いをやめるという決定をしているので、今回も公開されないので取扱には注意願いたい。特にオブザーバの皆様よろしく願います。

今日は非公式だが、この後に後期の現地調査の情報共有会を行う予定。14時から16時まで。JGC委員以外の調査員4名も会場に来られる予定。その後、今日の南紀熊野と霧島の審査結果連絡を16時10分以降に直接委員長と副委員長に電話していただく。16時25分にはこの会場でプレス発表を行う。それと同時に、先ほど修正していただいた文章をwebサイトに公開する。

今日の終了予定は16時50分になっている。その後、非公式だが、残ることが可能な方は1階のレストランで会食を調整しているので、来ていただけそうな方は声掛けをお願いします。

委員長：他にあるか。

事務局：朝の報告事項で言い忘れたが、10月6日は今年初めてのInternational Geodiversity Dayになる。

昨年の11月に開催されたユネスコの総会で毎年10月6日をユネスコの決めた International Geodiversity Day にしようということが決まった。今年初めて、10月6日を皆さんでお祝いしようということになっている。世界ジオパークネットワーク (GGN) のほうでは SNS を中心に毎日のように International Geodiversity Day について広報をしているところ。日本でもユネスコ世界ジオパークの9地域が色々と写真を提供したり、発行物を出そうということで記事を書いたりしているところ。日本時間の10月6日21時にデジタルでお祝いしようというイベントも計画されているので、関心のある委員の皆さんはご一緒いただければと思う。

10月13日は、国際防災デー。この日も特に日本から情報発信含めて、何かこの日にやろうと準備中。

あと、国際ジオダイバーシティデーと呼ぶのか、国際ジオ多様性の日と呼ぶのか決着はしていない。カタカナで揃えたほうがよいのではないかという意見が以前に議論された時には多かったので、国際ジオダイバーシティの日というような書き方をしていることが多い。

委員長：今あったように、国連の定めた色んな日がある。実は昨日は国際ツーリズムの日だった。それについては残念ながらアクションはほとんど起きなかった。

国際ジオダイバーシティデーと防災の日に関しては色んなアクションをやっていただきたいので、今キャンペーンを展開しているところ。それらに関して世界ジオパークネットワークは国連の日と連携した活動を促進してそれによってジオパークのビジビリティを上げようとしているのが世界の流れ。

インテンシブコースについての紹介と、次回の会議の決定も願います。

事務局：ユネスコとGGNが共催で、過去2回デジタルで研修会を行っている。もともとはギリシャのレスボス島ユネスコ世界ジオパークで毎年行われてきた集中研修会。これが今年の6月にデジタルで行われる予定が、参加申込者が少なかったという理由で11月15日から10日間開催予定となっている。これはまだ参加申し込みができるはずなので、興味のある方がいらっしゃれば。10日間、宿題も出るし、発表、ワークショップ、インタラクティブなブレイクアウトルームを使ったセッションもあるので、かなりタイトなスケジュールな上に、毎日夜の0時、1時まで続くこともある。ご参加いただける方はよろしく願います。

次回の委員会は12月16日(金)を予定している。冬の委員会の時にいつも審査基準検討会議を翌日にくっつけてやる。今年はまだ決定出来ていない。これは決まり次第お知らせする。12月16日は委員会を1日かけてやる予定。

委員長：最後、副委員長よろしく願います。

副委員長：5月にお伝えしていた国土計画協会の情報機関誌「人と国土21」は、7月号に「ジオパーク特集」として無事発刊した。本特集では、委員長をはじめ、JGCの皆さん、JGNの理事長、事務局長、各地のジオパークの専門員・スタッフの皆さん、合計12名にジオパークの現在について書いていただいた。執筆に際しては、間際の締切りで皆さんには大変ご苦勞をかけたが、良い特集になったと思う。JGN事務局次長にも各地から写真を集めていただき、ご配慮いただいた。「ジオパーク特集」は、国土計画協会からも関係者に好評であるご連絡をいただいている。冊子は、JGCの委員と各ジオパークに1冊送らせていただいた。ご協力に感謝申し上げます。今後ともよろしく願います。

委員長：以上になるが、皆さん言っておきたことがあれば願います。

一同：(意見なし)

委員長：以上になる。皆さんありがとうございました。